

社会科における言語活動とは

—地域の豊かな想像と創造のために—

大分大学教育福祉科学部准教授 永田忠道

1. 社会科と言語活動の関係

今次の学習指導要領改訂の主眼の一つに、言語活動の充実が掲げられている。その背景には、わが国の中等教育段階の子どもたちが、世界的な学力調査における「読解力」に対応できていない、との危惧がある。

OECD(経済協力開発機構)が2000年より実施しているPISA調査(生徒の学習到達度調査)は、2003年、2006年と「読解力」の調査を積み重ねているが、日本の子どもたちの結果は、初回の2000年調査で世界第8位、2003年調査では第14位、2006年調査では第15位との状況が続いている。

この調査結果で一躍、世界的に注目を集めた国がフィンランドであるが、2006年調査でそのフィンランドを上回り、世界一となったのが、韓国であった。

筆者は、2006年調査の結果が世界的に公表された2007年12月に韓国における教員研修と初等中等学校の、その翌年の12月にはフィンランドにおける市民性教育と義務教育学校の現地調査を実施した。

韓国では、読書教育の充実とともに、大学入試問題を論述型にすること等々、国をあげての「読解力」向上の成果が反映された旨の見解を各所でうかがった。一方、フィンランドでは日本で数多くの書籍で紹介されているような特別なメソッドの成果というよりは、教育現場で本来あるべき、またはなすべき昔

ながらの学びの営みが堅実に実践されている様子が印象的であった。

このような教育の世界的な潮流の中で、わが国では、どのように言語活動の充実を図ろうとしているのだろうか。このたびの学習指導要領解説においては、中学校社会科について、これまでも様々な資料を適切に収集し、活用して事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに、適切に表現する能力と態度を育てることを各分野共通の目標としてきており、その目標の実現をめざして、創意工夫された学習がなされてきている、と評価されている。そのうえで、社会的な見方や考え方を養うことをより一層重視する観点に立って、社会的事象の意味・意義を解釈する学習や事象の特色や事象間の関連を説明するなどの言語活動にかかわる学習を一層充実すること、をめざす方向性が示された。

言語活動の充実というと、言葉や文字による学習活動の展開のみが先行されそうだが、社会科でこれまでも大事にしてきた適切な資料の収集や活用、多面的・多角的な思考・判断を経た表現等々も、重要な言語活動の一環として位置づけられている。今後は、さらに「意味や意義を解釈する学習」や「特色や関連を説明する活動」の充実が期待される。

それでは以下、地理的分野の学習活動に焦点を絞って、今後の社会科における言語活動のあり方や進め方について、具体的な授業レベルで若干の考察を行ってみる。

2. 実践「ブラジル」における言語活動

ここで取り上げる授業は、2008年11月に行われた大分県宇佐市立安心院（あじむ）中学校の小野究先生の実践「ブラジル」である。

本実践は、現行の学習指導要領に即した世界の国々の調査の一環であったが、1時間のみの特設的な授業として展開された。

実は本授業の構想時に、小野先生と筆者は協議を行い、ある調査結果を参考にしながら、授業展開を構成することとした。その調査とは、国立教育政策研究所（国研）が2007年1月に実施した「特定の課題に関する調査」である。本調査では、社会科における基礎・基本となる知識・概念および問題解決的な学習の実現状況について、地理的分野については全国101校の3,211名を対象にペーパーテスト等が実施された（詳細は国研HP参照）。

本調査でとくに注目されるのが、地理的分野のペーパーテストにおける「ブラジル」の問題である。この問題は4つの小問で構成されている。第1問は、サンパウロでの特徴的な3枚の写真を見て、「なぜ」、「どうして」で始まる疑問を記述させる問題、第2問と第3問は、ブラジルに関する複数の資料を読み取りグラフ化させる問題と、資料を選別する力をみる問題である。そして、最後の第4問は、ここまでの問題で利用したり作成したりした資料を活用して、ブラジルの特色について簡単なキャッチフレーズと根拠を記述する問題であった。

このような問題に対する中学生たちの結果は、第1問の疑問を記述する問題が90.4%、第2問と第3問のグラフ化と資料選別の問題は88.3%と71.2%の通過率であった。そして、第4問のキャッチフレーズと根拠の問題の通



過率は65.9%であったが、このうちキャッチフレーズと根拠の完全な正答率になると43.2%にとどまった。

このような結果から、現在の中学生の地理学習の実態として、疑問の設定や資料の読み取りと作成には概ね良好な結果が得られているが、課題は第4問の結果からも明らかなように、国や地域を調べた成果を自分なりの言葉で、いかに表現できるかどうかである。

そこで、安心院中学校での実践「ブラジル」にあたっては、子どもたちが授業前にブラジルについて、どれほどの認識があり授業の後に、どのような変化が観測されるのか、子どもたちの発言と記述によって、確認することをお願いした。

そのため、小野先生による実践「ブラジル」では、授業前に生徒一人ひとりに「ブラジルといえば・・・」とのテーマで言葉を用意させていた。その一覧を見ると、生徒31名中24名が「サッカー」に関する記述で、次に続いたのが「サンバ」、「日本とのかかわり」であった。そこで、授業では「サッカー」をNGワードにしたうえで、グループの中で2つの集約した言葉を提示するように話し合いが行われた。次に、グループから出された言葉を、これまでの世界の国々の学習で利用した国の特色を解明していくための4つの視点に位置づ



3. 地域の想像と創造のために

実践「ブラジル」を通して、授業前後の生徒たちのブラジル像の差異は明確であった。授業前の常識的で一面的なブラジルの姿から、授業後には4つの視点を軸にした地理的知識に基づく多面的・多角的なブラジル像を、自分たちなりの言葉遣いにより現出させていた。

このような授業のあり方を紹介すると、それほど新しい地理授業ではないのでは、との声が多いとも思われる。しかし、実はそのような評価こそが、いま求められている社会科における言語活動のあり方なのである。

かつての地理的分野の学習においては、世界や日本の各地をなるべく網羅的に取り扱うことを主眼としたために、先生方や生徒たちは膨大で特殊な地理的知識の処理に苦闘する些末な内容主義に陥っていた。現行の学習指導要領下での地理的分野は、一変して世界の国々や日本の都道府県の学習は表層的には限定的であるために、極端な方法主義的学習に特化してしまう傾向が強くなっている。

2012年度からの新しい地理教科書においては、些末な内容主義からも極端な方法主義からも距離をおくカリキュラムが構成される。そこで求められるのは、世界や日本の各地の学習について、生徒たちの常識的で一面的な地理認識をいま一度、本来的な丁寧な手法によって、より質の高い概念内容豊かなものへと高めていくような授業のあり方である。

生徒たちが自分なりの言葉や表現によって描く地域の想像を、より科学的な地域の創造へと導いていく。実践「ブラジル」のように、派手さはないが、堅実で丁寧な地理授業の積み重ねこそが、結果的に、社会科における言語活動の充実にも結実していくのである。

ける活動が行われた。4つの視点とは「自然」、「文化」、「産業」、「結びつき」であり、生徒たちからの言葉が4つの視点に、意味を解釈しながら整理されていく中で、ブラジルについての単純な単語や認識が、地理的な意味内容を含んだ知識として発展していった。

授業では、小野先生が自身のブラジルでの現地視察や体験も交えながら、ブラジル独特の楽器やコーヒーの苗木の現物、リオのカーニバルの映像、そして大規模な機械化された農業と一方では伝統的な農法が混在するような産業の実態も取り扱われた。

授業の後半では、4つの視点でブラジルの特色を追究してきた成果を、それぞれの視点ごとに、生徒たちなりの簡潔な言葉で整理する取り組みが行われた。「自然」については「緑あふれる広い国土」、「文化」は「情熱的で活気のある文化」、「産業」は「資源が豊富で成長していく国」、「結びつき」では「日本との関係が深く様々な人種が共生している」との整理が行われた。

そして授業の最後では、このような4つの視点の整理を踏まえて、改めて小野先生から「ブラジルとはどのような国だといえそうでしょうか」との投げかけがあり、生徒たちが個人なりの言葉で、ブラジルの特色についての説明の整理を行い、授業は終わられた。